

# 博士學位論文内容の要旨・審査結果の要旨

氏 名	高原 光啓
学位の種類	博士（神道学）
学位記番号	文甲第268号
学位授与の日付	令和6年2月15日
学位授与の要件	学位記則第4条第1項
学位論文題目	近現代神社祭祀制度の研究
論文審査員	（主査） 國學院大學教授 武田 秀 （副査） 國學院大學教授 西岡 和彦 （副査） 國學院大學教授 藤本 頼生

## 論文の内容の要旨

本論文は、将来的な祭式学確立を目的としつつ、三大祭（例祭・祈年祭・新嘗祭）及び大祭・中祭に位置付けられる個別祭祀（神武天皇祭等）の成立過程について検討すると共に、各々の祭祀執行の意義を考察するものである。

神社祭祀に関する研究をめぐっては、既に近世の国学者や神職・神道家たちによって実践的な研究が積み重ねられてきた。近代に入るや、神社の国家管理下、皇典講究所等において青戸波江らが実地指導に従事しつつ祭式作法の調査研究を進めた。その学統は、戦後の祭式指導者たちに受け継がれていった。こうして「学的研究と実地修練との両面を、平行して進めてゆくことが肝要」（長谷晴男）

という理念に基づいた祭式学・祭式研究が蓄積されてきたのである。

しかしながら本論文によれば、そこにはなお重大な課題が残されていると言う。すなわちそれは、従来の研究が、法令や作法に関する研究に偏り、神職が厳修すべき各々の祭典の原由、すなわち大・中祭に位置付けられる個別祭祀そのものの成立過程とその意義に関する歴史的研究が乏しいという点である。

こうした研究状況に鑑み、本研究の課題は、わが国古来の祭祀制に淵源し、かつ現行の「神社祭祀規程」で受け継がれている祭祀、すなわち祈年祭・新嘗祭・例祭に代表される「個別祭祀」の形成過程の歴史的考察を通じて、祭祀厳修の意義を改めて考察することに置かれる。本研究は、以上の課題を説明すべく、次の各論を設けて考察を展開してゆく。

第一章「近世の神社と祭祀」では、近世の神社祭祀の諸相を知る手掛かりとして、主として『神道大系』所収の史料等を用いて、神社祭祀の分類と考察が試みられる。そして近世期におけるこうした神社祭祀の厳修が、近代神社祭祀制度形成の前提として、その一定の基盤を準備する意義を有していたことが強調される。

第二章「式部寮達「神社祭式」の制定過程」では、明治八年「神社祭式」の制定過程に関わる先行史料として、『祭式』『祭儀』の内容が検討される。この検討によって『祭式』記載の諸点が、一部改編されつつも「神社祭式」に採用されていたことが明らかにされる。併せて担当官庁の式部寮の成り立ちについても言及され、同寮や神祇省がいかに制度形成に関わり、それがどのようにして「神社祭式」制定へと繋がっていったのかという点についても考察される。

第三章「例祭の制定と祭祀制度形成」では、神社固有の大祭である例祭について、その「沿革」「祭日」「祭式」「経費」の四点から検討される。「沿革」に関しては、明治四年十月の時点で「例祭」の名称が公式に用いられたこと、前出『祭式』に記載される「年中祭祀ノ中大祭一度ヲ以テ例祭トス」という語句がそのまま「神社祭式」に取り入れられたこと等の諸点が指摘される。「祭式」については、明治初年以來の公的な祭式次第が次第に整序され、諸系統に分かれていた祭式が、明治八年「神社祭式」において一応の統合に至った経緯が辿られる。「経費」をめぐることは、明治五年から七年にかけての教部省・式部寮の応酬を経て、近代の幣帛供進制度の財政的な仕組みが整うに至った経緯が改めて確認される。

第四章「祈年・新嘗祭の再興と背景」では、神社祭祀としての祈年祭・新嘗祭の意義が改めて検討される。まず近世の神社における両祭の斎行状況が『神道大系』等の基礎史料を用いて検討され、近世において既に祈年祭・新嘗祭の両祭が執り行われている事例が存在することが明らかにされる。そして以上の考察を前提として、維新以降における両祭の再興過程が辿られる。

第五章「元始祭の成立過程」では、明治初期における元始祭の成立過程が概観され、同祭が明治建国の理念を直截に反映した祭祀であることが指摘される。ついで現代において同祭を執行する意義が再考される。

第六章「神武創業と神武天皇祭・紀元節祭」では、神武天皇祭・紀元節祭制定に至る過程が辿られると共に、両祭が制定当初の社会のなかでどのように受け止められたのかという点についても言及される。

第七章「天長節制定と天長節祭」では、宮中で始まった天長節祭が、大正三年の制度改編において改めて天長節祭として定められ、終戦後も占領政策の制約を受けつつ神社祭祀として受け継がれていった経緯が辿られる。

第八章「明治期神社祭式形成と民間祭式書」では、式部寮達「神社祭式」制定を承けて作成された明治期の祭式書群が紹介される。大正期祭祀制度形成の前史として、これらの祭式書群の位置と役割が考察される。

第九章「大正三年神社祭祀制度の整備過程」では、大正期における神社祭祀・神社祭式の整備過程が明らかにされる。まず明治二十七年に定まった祭祀の区分について言及され、ついで神社局内に設置された神社調査会で原案が審議されていった過程が辿られる。さらに当該期における制度形成の背景には、祭祀区分に伴う不備の解消と共に、神宮祭祀との整合性を図るという目的があったことが、当時の史料に基づいて明らかにされる。併せてここにおける制度形成が、これ以降の神社祭祀に与えた影響も考察される。

第十章「神社祭祀と本庁幣」では、神社本庁幣の意義が考察される。まず古代以来の天神地祇奉幣制度、近世から維新に至るその再興過程が顧みられる。そして古来の神祇祭祀・奉幣制の伝統を受け継ぐ本庁幣制度こそが、神社祭祀の正統性と公共性を象徴するものであることが論究される。神社祭祀の「伝統的かつ公共的祈り」を端的に具現するものとして、現行の本庁幣制度が受け継がれている所以が、重ねて再確認されるのである。

## 論文審査の結果の要旨

戦後の祭式研究は、神職養成課程の祭式指導者を担い手として推進され、精緻な諸研究が蓄積されてきた。けれども、その研究視角は、法令史や作法次第に関する研究に偏り、例祭・祈年祭・新嘗祭といった三大祭、また大・中祭に位置付けられる個別祭祀の原由や成立過程に関わる研究が、比較的等閑に付されてきたと言える。こうした研究状況に鑑み、本研究の目的は、現行「神社祭祀規程」に定められた個別祭祀、すなわち例祭・祈年祭・新嘗祭といった三大祭はじめ、大・中祭に位置付けられる諸祭祀の原由、その形成過程を検討し、改めて祭祀厳修の意義について考察することに置かれる。本研究の貢献としては、以下の諸点が挙げられよう。

第一に、上述の問題意識に基付き、現行の神社祭祀で行われている祈年祭・新嘗祭・元始祭等の、それぞれの歴史的背景、成立過程を明らかにしようとした点である。現行制度に受け継がれるそれぞれの祭祀の形成過程、その理念的背景を明らかにすることは、従来の祭式研究にはあまり見られないアプローチと言える。既存の研究の枠を超えて、祭式研究の新生面を切り開こうとする提出者の研究姿勢は、注目に価するものと言えよう。

第二に、言わば明治八年「神社祭式」前史として、これに先立つ近代以前の祭祀復興・祭式形成の過程を明らかにしようとしたことである。すなわち『神道大系』はじめ公刊・未刊の基礎史料を用いて、当時の神仏混淆と隔離がせめぎあう実態の只中、具体的にどのような諸祭祀が、どのような形式をもって執行されていたのかという課題を巡って、多様な事象の分類と考察が試みられている。この検討の結果、近世の神社においては、神社によって程度の差は認められるものの、今日に繋がる祭祀の大綱（長谷晴男「祭祀の大綱・祭祀執行上の原則・原則の細則」）を共有しつつ、年中祭祀が執行されていた状況が浮き彫りにされる。さらに近代以前の神社において、既に祈年祭・新嘗祭の両祭が執り行われていた事例が存在する事実も明らかにしている。そして近代の制度復興は、近世のそうした各社の祭祀厳修の積み重ねの上に展開していった側面があったことを論究するのである。近世の神社祭祀の諸相を、近代の制度形成、とりわけ明治八年「神社祭式」に集約するものとして把握するその研究視角は、今後の祭祀研究・祭式研究に一石を投ずるものと言えよう。

第三としては、大正期「神社祭祀令」制定前史として、明治八年「神社祭式」成立以降の、民間における祭式作法書群の歴史的意義を明らかにしたことである。とりわけ第八章「明治期神社祭式形成と民間祭式書」では、精力的な史料探索の成果を踏まえ、明治期の祭式書群の紹介と分析が行われる。そして、それら祭式書群が、大正期における祭祀制度形成に、どのように連鎖していたかが考察される。従来の研究では、当該時期は「諸流混淆の時代」と評され、一種の混乱期・過渡期として言及されることが多かった。けれども本研究では、民間祭式書群の充実こそが、中央の祭祀制度形成を後押ししていった経緯が跡付けられる。かくして本研究は、大正期における制度形成が、こうした官民挙げての模索の帰結としての歴史的意義を担うことを強調する。こうした研究視角もまた、従来の研究史の盲点を補うものとして評価することができよう。

さらに注目すべきは、古代以来、そして維新以来の「神社祭祀における幣帛奉獻儀」を継受する現行の本庁幣制度の意義を、正面から問い直している点であろう。本研究は、まず神社に幣帛を奉る故実の来歴に遡り、ついで維新以降漸次整えられてゆく幣帛供進制度の成立過程を跡付ける。さらに本庁幣制定時における神社界の議論の応酬を紹介しつつ、古代以来の幣帛奉獻制度の伝統を受け継ぐ本庁幣制度こそが、神社祭祀の正統性・公共性を象徴するものであることを改めて論究する。神社祭祀の「伝統的かつ公共的な祈り」を、端的に示すものとして本庁幣が受け継がれている所以、そして、そこにこそ祭祀厳修の本義がある所以が重ねて再確認されるのである。現行の本庁幣制度の意義を歴史的に再検討し、併せてその現代的意義をも考察しようとする提出者の研究姿勢は、まさに祭式指導者としての「稽古照今」の実践にほかならない。従来の祭祀研究・祭式研究への、大きな問題提起としての意義を担うものと言えよう。もちろん、残された課題も少なくない。本研究の問題点は、提出者も自認している通り、個々の論点の提示が、必ずしも神道史の通史的把握に繋がっていない点であろう。そもそも『古事記』『日本書紀』（崇神天皇条）において、天神地祇奉幣祭祀の起源は、調庸制ないし租税制の形成と軌を一にするものであったことが伝えられている。古代の調庸制・租税制が、神まつりへの捧げものと不可分であったとされる所以である。幣帛の本義について考察する以上、その古代の原由に遡るより根底的な考察が求められるところであろう。

さらに近世における神社祭祀の検討においては、朝廷の朝儀再興史をより踏まえる視点が必要なのではないだろうか。近世の歴代天皇は、朝廷衰微の切実な現状認識のもと、ありうべき古典制度復興・朝儀再興に向けて、世代から世代へと、ロングスパンの模索を繋



いでいった。こうした古典制度に由来する祭祀伝統（式内社、山陵等）が、在地においても各々発掘され、地域復興の拠り所として希求されていたのである。こうした観点がより加味されていたなら、さらにクリアな通史的見通しに立った論述が可能だったのではないだろうか。

さらに言えば、敗戦による変革をスルーして現行祭祀制度の意義を論ずることは、提出者も自ら言うように問題視されて然るべきであろう。神道史上の大きなアポリアが「敗戦による断絶と持続」如何の問題である。提出者は、今後、天皇の祭祀大権の問題、占領政策による制度改変などの問題等にも、積極的に取り組んでゆくことが望まれよう。また祭式学が開かれた学問を目指す以上、神道学以外の諸領域から寄せられている種々の疑義に対しても、然るべく対応しなければならぬであろう（宮地正人氏、赤江達也氏等）。

ともあれ、本研究が、祭式研究の刷新を期して、「近代」の制度形成の要因を「近世」に遡って明らかにしようとしたこと、例祭・祈年祭・新嘗祭といった三大祭、また大・中祭の個別祭祀の成立過程とその意義を一次資料に拠って再検討したこと、現行規程に基づく神社祭祀の要諦を「幣帛の本義」に遡って明らかにしようとしたこと等は、従来の研究史への少なからぬ貢献と言えよう。提出者は、これからも現任の祭式指導者として後進育成に励むと共に、祭式学の学的確立を目指して、本研究で検討し得なかった諸問題について、さらなる探索と考察を重ねてゆくことが期待される。よって本論文の提出者、高原光啓は、博士（神道学）の学位を授与される資格を有するものと認められる。

氏 名

鈴木健多郎

学位の種類

博士（宗教学）

学位記番号

文甲第269号

学位授与の日付

令和6年2月15日

学位授与の要件

学位記則第4条第1項

学位論文題目

近世遠江における国学の展開―内山真龍とその門人を中心に

論文審査員

（主査）國學院大學教授

遠藤 潤

（副査）國學院大學教授

松本 久史

（副査）愛知学院大学客員教授

林 淳

## 論文の内容の要旨

本論文は、国学という学問が近世社会でどのように発展をとげたのか、国学者たちがなぜこの学問を究めようとしたのかという問いについて、遠江地域の国学に焦点を定め、代表的な学者のひとりである内山真龍とその門人たちの思想や活動を分析することで、答えようとするものである。

遠江という地域は、荷田春満によって国学がもたらされて以来幕末に至るまで、国学の展開において重要な役割を果たしてきた。なかでもこの地の国学者である内山真龍と栗田土満が本居宣長と学問的交流を持つようになってから遠江の国学は一層の発展を遂げた。本論文は、その中心人物である真龍とその門人たちに焦点を当てて考察を進める。すなわち、遠江の国学者の思想と行動の具体相を検討することによって、遠江国学の発展過程およびこの地で国学が一大勢力となりえた背景について明らかにしようとするものである。

本論文は、序章と七つの章、そして終章からなる。

「序章本論文の目的」では、近世の遠江における国学の歴史を概観し、遠江に国学に関する先行研究を整理した上で、本論文が遠江を対象地域に設定する理由、遠江の国学の展開過程を分析することの意義、これらの問題を明らかにするために取り組むべき課題について説明した。

「第一章 内山真龍と本居宣長の交流―真龍の学問形成過程解明のために」では、内山真龍の学問形成に大きな影響を与え、遠江の国学が一層発展する重要なきっかけとなった、真龍と宣長の学問的交流について、先行研究をふまえつつ、これまで先行研究が扱ってこなかった一次史料の分析によって、真龍と宣長の交流と意義について考察した。その結果、両者間における双方向的な学問交流を明らかにした。

「第二章内山真龍の歌謡注釈―『古事記謡歌註』を対象として」では、真龍の学問に対する宣長の寄与の実態について検討するために、真龍による古事記歌謡の注釈書『古事記謡歌註』を分析対象とした。『古事記謡歌註』において真龍は宣長の注釈を踏襲することが多く、それは『古事記伝』以外の宣長の著作をも参照するものだった。真龍は、契沖や賀茂真淵による注釈を採用することもあり、さらに真龍独自の解釈を示す場合もある。このような真龍の注釈は、諸説の類聚を作成するという姿勢にもとづくものであった。

「第三章 『仏度伝』に見る内山真龍の仏教観」では、著書『仏度伝』を検討し、真龍の仏教観や世界観などを考察した。本書は上代仏教史を史料とともに論じるもので、真龍は本書を教戒の書と位置づけていたと考えられる。真龍は、万物を基礎づけるものとして天地の間に「一柱」があり、これは「心柱」であるという世界観を示し、この「心柱」との関係から戒の重要性を説いた。日本には達磨大師の立てた「心柱」が伝えられたとする一方、本居宣長の神觀念に従って、この世の理法は直毘神と禍津日神が司っていると理解した。そして、両者をふまえて直毘神の恩頼や仏の力を享受するためには戒を遵守することが重要だとした。こうした考えの背景には、真龍の周辺地域で発生した打ちこわしに対する危機意識があったと考えられる。

「第四章 遠江の国学と朝廷の交流―内山真龍による白川家への『神号解』献上を中心に」では、真龍の著書『神号解』が白川家に献上されたことについて、遠江の国学と朝廷・白川家の関係におけるその意味を検討した。本書は『古事記』に登場する神名に注



釈を施したもので、宣長の『古事記伝』の説を肯定的に引用する例が多く、地名については真龍自身の説を優先するものの、全体としては宣長説の継承・発展という性格を持つ。献上については、一次資料の分析によって、下賀茂社の泉亭梢永が真龍と白川家を仲介していたことが明らかになった。真龍は同家への入門を懇願してもいたが、それは自邸に造立した真淵の霊社での祭祀執行について公的な許可を得るためと考えられる。他方、真龍と白川家の交流には夏目麿の関与も大きかったと思われる。麿は国学の発展を目指した出版事業を展開するにあたり、同家との接触に注目していた。また、当時の遠江では吉田家による神職の組織化が進むことに対して同地の神職にはそれに抗う動きが生じており、このような背景によって麿が白川家に入門していたことにも注意すべきである。

「第五章石塚龍麿の歌論研究と古道論」では、真龍の門人である石塚龍麿の古道論の特徴について、彼の歌論『やま菅』を主対象として論じた。龍麿は同書で『万葉集』所収の歌などに対する漢籍や仏説の影響を指摘しつつ、真淵から宣長へと継承された、古言・古意・古道を順次説明するという姿勢を踏襲し、『万葉集』解釈にあたつて古言の理解によって古意を明らかにしようとした。龍麿は宣長と同じく『古事記』における神代を古道の基準とした上で、対象を『万葉集』に定めてその古道のありようを探った。こうした研究姿勢に対して、真龍をはじめ真淵の学問を尊重する門人たちは批判的だったが、龍麿は批判をも辞さない態度で真淵や宣長の説を検討することが彼らの顕彰につながると考えていた。

「第六章夏目麿の国体論——『古野の若菜』を中心に」では、真龍の門人である夏目麿の国体論について、著書『古野の若菜』を対象として論じた。麿は同書で、治国の要として君臣の別の厳守と武威による統治をあげる。上巻では、日本の「神代の道」は、仏教・道教の教えと異なり「人の素生」を尊重するもので、君臣の別もこれに根拠をもち、この道が代々伝えられていると説明する。下巻では、文と武の関係性について論じる。為政者の威厳が減じて反逆がおきるのは徳のみで世を治めようとするからであり、治世には武威が重要だと述べ、日本ではそれは神代に淵源する正しい伝統であり、儒仏の排除が必要だとする。このような麿の国体論には、産霊神や直毘神・禍津日神を重視する宣長の神観念や世界観の影響は見られない。こうした武威統治強調の背景には対外危機への意識は見られず、麿の地域重視の姿勢からも、主たる問題意識は国内を対象とするものだったと考えられる。

「第七章近世遠江の国学における古典観と学統観の変遷」では、遠江の国学における記紀研究の歴史を通観し、古典観や学統観の変

遷を考察した。遠江に国学をもたらした荷田春満は、『日本書紀』の神代卷には教えとしての「神祇道德」が伝えられているとする一方で、古義の解明には古語の考究が不可欠だと考えていた。杉浦国頭をはじめ初期遠江国学を担った春満の門人たちはこの春満の姿勢を忠実に継承した。賀茂真淵は門人たちに『日本書紀』の訓について研究するよう強く指導する一方、「神祇道德」など書紀に対する道徳的解釈は採らず、晩年には書紀の古意を正しく理解するために『古事記』の重要性を主張した。真淵の門人である内山真龍や栗田土満は『日本書紀』研究を継承したが、それは語義注釈を中心とするもので、彼ら以降の遠江の真淵門人たちにおいては、記紀のうち『古事記』を重視する古典観が確定し、幕末に春満を顕彰する動きが高まる中でもそれは変わらなかった。

終章では各章をまとめた上で論文全体の結論を示す。すなわち、遠江国学の発展には、本居宣長の研究方針や古道論が大きく寄与した一方で、担い手たちには賀茂真淵の学問を継承しているという自負が共有されていた。彼らは師説を顕彰しつつもその批判をいとわず新たな視点や方法で古意の解明に努めており、他方で自らを取り巻く国家や社会の状況と関連づけて学問に取り組んでいた、と結論づけた。

### 論文審査の結果の要旨

本論文は、近世社会において国学という学問がどのような発展をとげたのか、また国学者たちの動機は何か、という問いを視野に収めつつ、遠江地域の国学を対象を定め、その重要人物のひとりである内山真龍とその門人たちの思想や活動について、テキストに沿った内容分析とそのテキストの外的条件——すなわち他の諸テキストとの関係や書物としての流通など——の検討をあわせて行うことで総合的に考察し、遠江の国学の展開過程とその学問的特徴を明らかにしようとするものである。

本論文の総体的な特色は、第一に『古事記謡歌註』『仏度伝』『神号解』といった、これまでその全体を検討されることがほとんどなかった内山真龍の重要著作について、本文の精緻な読解にもとづいてそれらの特徴を論じた点にある。序章で明らかにされているように、論者は研究の出発点において、遠江の国学の歴史の概要を把握するとともに、これまでの研究状況を具体的に確認し、研究が手薄

な部分を的確に抉出する。遠江の国学の展開において真龍は鍵となる人物の一人であったにも関わらずテキストの読解が進められてこなかったものであり、論者はこの状況をふまえて真龍の史料を博搜し、主要著作についてテキストを丹念に読んでいく。その成果は第二章から第四章に明らかであり、地道な読解の結果、本論文はこれまで指摘されてこなかった真龍の思想的特徴の解明に成功している。

その特徴を把握するにあたって、遠江の国学やその外側をなす国学一般の動向を押さえている点も、本論文の考察を説得的なものにしている。論者は、遠江の国学を理解するためには、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長による神祇に関わる古典の解釈の方法を把握した上で、特に真淵および宣長の解釈に対して真龍以降の遠江の国学者たちがいかなる評価をしていたかを検討することが重要だと考える。このような視点にもとづき、各章では個々の国学者やその著作が評価されていく。第一章で宣長と真龍の学問的交流を把握し、第二章および第四章で『古事記謡歌註』や『神号解』の具体的な内容を検討する中で、真龍が基本的には、古道や神祇に関する宣長の理解や『古事記伝』をはじめとする諸業績をふまえて研究を進めていた実態をとらえている。第五章と第六章では真龍の門人の石塚龍磨や夏目甕磨の学問について検討し、その研究方法に宣長の影響が見られると論じる。他方、彼ら遠江の国学の担い手たちが賀茂真淵の学問を継承しているという自負を共有していたことをも指摘しており、単純ではない学問の系譜意識や継承のあり方を具体的に明らかにしている点は評価できる。こうした流れを巨視的にとらえたときに通底しているのは、神代に関わる古典として何が正しいテキストとして選ばれるのかという問題であり、それは宗教研究における聖典論に連なるものである。特に、真龍ら遠江の国学者たちにおける『日本書紀』から『古事記』への首座の交替は、本論文が明確に論じたところである。彼らはさらに、古典の解釈に際して、そこに規範性を求める態度を希薄化している。また、第三章で論じているように、真龍は禪の達磨大師の説と本居宣長の神理解の双方を矛盾なく用いて道徳的な語りを構成しており、国学という学問が神祇や神道のみと結びつくものではないことも示される。テキスト解釈に関連して、第七章では『日本書紀』を漢文として読むか、傍訓を重視してやまとぶみとして読むかという問題について真淵と真龍のあいだの鋭い葛藤が示される。これは国学の復古意識にも深く関わるものであり、さらにふみこんだ考察が望まれる。

さて、本論文では遠江の国学者たちの著作に関わる社会的文脈についても視線が向けられている。著作に関わってどのような行動が実際に展開されたかということへの注目があり、それを具体的に追うことで、地域社会や国家との関わりにおいて国学という学問が果

たした役割を明らかにしようとしている。地域に関して、遠江の国学が地域と深く結びついていたことの包括的言及はこれまでもあったものの、真龍には自らの地域に関わる学問についての自負や自信があったことや彼の学問的営為の動機に地域社会の秩序についての関心があったことなどを著作の具体的検討を通じて指摘したことは本論文の成果と考えられる。他方、今後、国学という学問の在地性をめぐって、真龍による門弟教育や地域での教化活動についての具体的解明がなされるならば、その論はより充実したものになるだろう。また、国家との関係については、真龍が白川家を通して朝廷へ接近するという動きの実態を史料にもとづき明らかにし、また甕磨の国体論を分析して、家柄の重視から君臣関係を論じるなど、彼の関心が対外関係ではなく国内の統治に向いていたことを論じている。遠江の国学が持ったこのような二方向の社会性のうち、本論文では特にそれが地域と深く結びついていた点が強調されていると思われる。ただ、遠江の在地の名主層らが国学に向かうという行動には、全国的な学問ネットワークに参加することで即自的な在地性を克服する、あるいは国学という学知が地域から離脱していくという方向性も認められる。本論文の到達点の先にはこのような観点からの研究の展開も期待したい。

以上見てきたように、いくつかの課題はあるものの、本論文が、遠江の国学について、内山真龍とその門人に焦点を絞り、その著述内容を丹念に読解するとともに、著述の社会的位相を検討したことによって、近世の地域社会における古典研究の実態解明とその宗教史的な理解に新しい知見をもたらしたことは明らかである。よって、本論文の提出者鈴木健多郎は、博士（宗教学）の学位を授与される資格があるものと認める。

氏 名 齋藤 樹里

学位の種類 博士（文学）

学位記番号 文甲第270号

学位授与の日付 令和6年2月15日

学位授与の要件 学位記則第4条第1項

学位論文題目 日本近代文学における「芝居」と「女性」——太宰治・齋藤緑雨を中心に——

論文審査員

（主査） 國學院大學教授 石川 則夫

（副査） 北海道大学教授 中村 三春

（副査） 福岡女学院大学教授 大國 眞希

## 論文の内容の要旨

本論文は日本近代文学において、歌舞伎、文楽、義太夫そして常磐津を中心とする「芝居」の受容がどのように行われていたか。特に前近代から近代への過渡期における小説創作の実態に、所謂西欧文学からの移入状況ばかりではなく、江戸期から継続している大衆文化が接続していることを改めて考察したものである。したがって、この論点から導出されるのは、日本近代文学史に江戸期から昭和期までを貫く物語行為の内実に、日本文学の伝統的な特質を見極めてみるということである。

本論文の第一章「近代とは何か——明治二十年代と「芝居」——」は、第一節から第三節まで齋藤緑雨の「かくれんぼ」、「油地獄」、「門三味線」の三作品を、第四節で坪内逍遙の「梓神子」を事例として、各作品の物語行為において、「芝居」（明治二十年代前後に受容されていた歌舞伎、浄瑠璃、常磐津の詞章）の文言がどれほど多用されているか、まずは引用の典拠を精査するという地道な基礎作業を



行っている。その調査結果を踏まえて、それら引用された詞章等が各作品の登場人物の造型に関わる語り、また特に心情を描写するところ如何に寄与しているかを考察するものである。この第一章では、齋藤緑雨による上記三作品の新たな作品分析の方法を提起し、緑雨の近代小説を再評価する見通しを論じている。また、坪内逍遙「梓神子」の分析においては、森鷗外との「没理想論争」の経緯の中で分析評価されて来た先行研究に対して、前近代文学の批判から近代文学の確立を目指していた坪内逍遙が、前近代の狂言作者をどのように評価しつつこれを克服しようとしていたか。単純な前近代批判に留まることなく、実は前近代と近代の文学を接続させる試みを実行していたという視点を提案している。

第二章「太宰治〈女性独白体〉①―構築される「女性」―」は、太宰治の所謂「女語り」、「女性独白体」の物語行為を表現し、それが太宰治作品の大きな特質を捉えられて来た作品群について、この物語行為がいかなる振る舞いを以てその行為主体を形成していくのかという行為論的な視点に立って、改めて考察したものである。「燈籠」、「きりぎりす」、「千代女」、「皮膚と心」、「待つ」、「饗応夫人」の作品論を六節に分けて論じている。これらの論考に通底するのは、所謂〈女性独白体〉の物語行為が特質として評価されて来た太宰治作品の語りが、単なるモノログとしての「独白」ではなく、自分自身に返ってくる「独白」、つまり自己再帰的な語りとして検討する試みとなっており、これら「女性独白体」を物語行為とする作品群の主体となる「私」が、語る行為によって「女性」を演出し、自らを「女性」として構築していく様相を明らかにしている。第三章「太宰治〈女性独白体〉②―「芝居」の中の「女性」―」は、第一章のキーワード「芝居」、第二章のキーワード「女性独白体」を統合した論点を以て太宰治「おさん」と「ヴィヨンの妻」の二作品を考察するもので、第一章の手法である「芝居」の引用箇所を精査し、その文言が作品読解に影響を及ぼすところを余すところなく論じており、両作品の先行研究への批判検討を踏まえて、これまでも注目されて来た太宰治の義太夫体験を捉え直し、それらの伝統的な物語を「覚え込んでいた」と自ら述べる作家の体験を、その作品読解への新たな視点として提案している。

附章の「近代文学研究の手法と可能性―比較文学、蔵書調査―」は、森敦「天上の眺め」とその韓国語訳の比較考察と、國學院大學の旧折口博士記念古代研究所蔵資料類の中から、室生犀星から折口信夫への献呈本の実態調査と、そこから浮上する交流関係の考察となっている。

## 論文審査の要旨

本論文の主旨については、「序章 近代文学の「芝居」と「女性」において端的に示されている通り、「芝居」と「女性」という二つのキーワードを中心に考察を進めるものである。具体的には、齋藤緑雨の小説作品と太宰治の小説作品を取り上げて分析、考察しようと試みている。その手続きは、「同時代言説や同時代の社会文化状況、当時既に成立していた文学や芝居のような先行テキストを足掛かりに」していくと記された上で、本論文で使用する「芝居」は所謂「旧劇」とされている、歌舞伎、文楽（人形浄瑠璃）の舞台や狂言台本、そして義太夫や常磐津といった邦楽・舞踊というところを範囲とするとしている。

ともすれば西欧文学の強い影響下にあった作家と、その作品を中心として把握されて来た日本近代文学の概念にあつては、逆に、日本の伝統文学からの流れが蔑ろにされて来たところが否めない。その側面に光を当ててみることで、前近代から近代への文体と物語の流れを精査し、ともすれば前近代性を指摘されるが故に貶められていた文学作品の再評価を促そうとする論点である。たとえば、西欧文学、文化を摂取し、外国語の能力を駆使して翻訳を手がけつつ創作に取り組んだ近代作家たちは、その時代における一握りの知的エリートであつたが、翻つて先に示した「芝居」ほど多様な媒体でその当時の大衆に浸透したものではなかった。近代文学の読者で、特に同時代読者の文化的素養を踏まえるなら、日常生活に密着した文化としての「芝居」を背景にした作品享受の様相は、改めて掘り起こされてしかるべきであろう。そして、こうした分析にとっては、齋藤緑雨が稀代の芝居通であつたということからも、考察対象としての特権性を有しており、その作品における「芝居」の要素を点検した上での作品再評価は意義深いものであろう。また、第二のキーワードである「女性」とは、〈女性全般〉ではなく、太宰治作品に特徴的に見られる〈女語り〉、〈女性独白体〉によつて表出される概念である。これらの作品群から代表的なものを取り上げ、語り手が女性であるという判断を前提にして来た読み、従来の作品解釈の偏向性を解体し、一人称回想体の物語行為の過程において、〈女性〉が語り手のあり方として、語り出され、読み出されていくという行為論的な作品評価を目指すものである。

以上のように、「芝居」と「女性」という論点は、本来的には個別なものであり、それぞれが第一章と第二章の論考群にまとめられ

ている。しかし、この二つを結び合わせた考察の成果が太宰治の「おさん」と「ヴィヨンの妻」という二つの〈女性独白体〉作品への読解へと展開し、本論文の第三章として位置づけられている。

第一章「近代とは何か―明治二十年代と「芝居」―」は、齋藤緑雨の「かくれんぼ」、「油地獄」、「門三味線」、そして坪内逍遙「梓神子」の四節からなっている。

齋藤緑雨による三作品の考察では、まず「かくれんぼ」の特異な地の文に溶け込んでいる多様な「芝居」の要素を指摘、たとえば『仮名手本忠臣蔵』、『伊勢音頭恋寝刃』や『心中天網島』などの主要な場面、あるいは登場人物の紙屋治兵衛、遊女小春の持つイメージを、「かくれんぼ」の山村俊雄、小春、お夏へと語り手が準えつつ物語って行くことで、引用元の物語内容や各人物に伴う豊かなイメージが喚起され、本作の心理描写を補完すると論じ、緑雨の近代への批判的姿勢に基づく作品という従来の評価を問い直す。しかし、「芝居」との類似性ではなく、差異において「かくれんぼ」の人物造型の「近代」が問題化されるという着想には、さらなる検討、言及が欲しい。「油地獄」論は、そのタイトルから連想される近松門左衛門『女殺油地獄』との比較考察になるが、本作発表時の前後に隆盛する近松浄瑠璃鑑賞、再評価の動きを、坪内逍遙らの近松研究会の活動などを踏まえながら、同時代の近松ブームの中において緑雨の「油地獄」を読み直す試みである。「女殺」という設定がない本作では、殺人という行為がもたらす地獄とは逆向きに「個の内面」を指向する心情の地獄を表現し、引用元と本作とを往還する読みにおいてそれは明確化すると論じるが、それらの差異を照応させる読みの力学の考察が課題となる。つづく「門三味線」論は、樋口一葉『たけくらべ』と比較考察されることが通例であった本作を、本文中に織り込まれる常磐津の物語と音曲の解明から、常磐津の詞章を踏まえつつ展開される物語の読解へ向けての考察である。本論の指摘で重要なのは、「門三味線」本文に見える(一)～(廿三)までの章立ての小見出しがすべて常磐津の詞章からなっているという調査であり、そこから本作の物語を常磐津の物語が促しているという読解の可能性が開けてくる。本論では一部の指摘のみに留まっているが、さらなる考察を期待したい。さて、坪内逍遙「梓神子」は、森鷗外との〈没理想論争〉の射程において検討されて来たが、本作の構造へ視点を向ければ、梓神子という前近代的な装置と前近代的な文体で近代批評を論じるという実験とも考えられ、そこから「おのれ」による前近代と近代の接続の試みであると論じる。西鶴や近松の怨霊が梓神子に憑依し、近代批判を述べ、語り手「おのれ」が反論するが、

それも「取次老爺」に批評されるという構造を指摘し、充分に示唆的ではあるが、この構造の動き、仕組みについて詳述して欲しい。

第二章「太宰治〈女性独白体〉①―構築される「女性」―」は、「燈籠」、「きりぎりす」、「千代女」、「皮膚と心」、「待つ」、「饗応夫人」の作品論を六節に分けて論じる。これらの論考に通底するのは、所謂〈女性独白体〉の物語行為が特質として評価されて来た太宰治作品の語りが、単なるモノログとしての「独白」ではなく、自分自身に返ってくる「独白」、つまり自己再帰的な語りとして検討する試みである。「燈籠」の「さき子」は新聞記事や手紙という〈記録〉をみずからの〈記憶〉で再構成しつつ、自らの語りによって自らを獲得すると論じる。「きりぎりす」は、夫の言葉を〈剥奪〉し続ける「私」が、外部にいる「こほろぎ」を自己内部の「きりぎりす」へ転位させるように、私だけに「わかる」夫を希求する「私」のエゴイズムの表出と捉える。「千代女」は、「千代女」になれない「和子」が、「千代女」ではないことを語り続けつつ、「千代女」になりたい願望を表出してしまう結末に、自己認識と他者からの認識・評価の差異への葛藤を見出し、この動きを「独白」の内実とみる。また「皮膚と心」では、「女心」の描出という評価を批判し、性差を前提とする読みから、あくまでも「私」個人の心理を語る「独白」であり、その物語行為の過程にあつて〈女〉としてあることを獲得していくと論じる。「待つ」は、発表媒体の特質からみて、同時代に流行した〈コント〉という批評性を含意する作品と位置づけ、「私」の「待つ」行為のみを語り続けるところに、既成の価値観への批評性が読み取れるとする。また、「饗応夫人」では、「奥さま」を相対化しているように語る「私」が、客人に対して限りなく「饗応」する「奥さま」を語り続ける行為によって、「私」自らを「奥さま」と同化させ、語り手「私」が「饗応夫人」になってしまうと結ぶ。

以上の作品論は、「私」の一人称独白体という物語行為によって、語り手が〈女〉になってしまうという機能を中心に分析しており、その着想に異議はないが、〈女〉になるという事象の仕組みの解明に言葉を尽くすべきであり、〈構築主義〉を標榜するものの、やや実体的な解釈に留まっている傾向がある点、再検討を促したい。

第三章「太宰治〈女性独白体〉②―「芝居」の中の「女性」―」は、本論文の核心をなす 本の論考、「おさん」論と「ヴィヨンの妻」論を収めている。

「おさん論」は、「小春の欠如と見立てられた「おさん」という副題が示す通り、本論文第一章での論点が活かされている。太宰治

の義太夫体験は周知のことで、本作も『心中天網島』等を典拠として論じられて来ているが、典拠作品における曾根崎新地の遊女「小春」という人物が、太宰の「おさん」には見当たらないこと、この差異について着目した論考である。作中の「私」が、「夫」を紙屋治兵衛へ、自らを「おさん」へ見立て、これと同一化しようとする語りは、自らを騙りながら「夫」の心中事件を意味付けようという行為であるとする考察は説得力に富む。また、「ヴィヨンの妻」論は、椿屋の主人から「私」が「おかる」と見立てられたことから、本作に胚胎する『仮名手本忠臣蔵』の断片を精査し、しかし単なる影響関係ではなく、この典拠を乗り越えようとする「私」の語りを指摘するところ斬新な論考となっている。

附章「近代文学研究の手法と可能性―比較文学、蔵書調査―」は、森敦「天上の眺め」とその韓国語訳の比較考察と、國學院大學が所蔵する折口博士記念古代研究所蔵資料類の、室生犀星から折口信夫への献呈本の実態調査と、そこから浮上する交流関係の考察となっている。前者は韓国語の語学力を駆使した論者ならではの論考であり、後者は折口信夫近代文学関係旧蔵本の初めての調査報告が中心となっている。どちらもまた今後の進展に期待したい。

さて、第一章、第二章においての諸論考は、有意義な問題提起に発しているものの、結論部の言及がやや不足気味であり、作品読解よりも依拠している分析概念が強調されるなど課題を残す論述が散見される。また、〈近代〉、〈前近代〉、〈物語〉などの近代文学研究上の概念が自らの充分な批判検討を経て使用されているか覚束ないところも見受けられる。これらは改めて論者において熟考することをするものである。

しかし、第三章では、これまでの論考での試行錯誤が実を結び、論者ならではの研究成果を提出し得ていると考える。典拠と見なされる原典資料の博搜に終始することなく、そこからの独自の問題提起は、新たな研究領域の開発を期待させるものであり、今後のさらなる追究を望みたい。

以上の理由から、本論文提出者齋藤樹里は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。